

フロイトとパヴロフ、あるいは言語と身体

——ゾーシチェンコ『日の出前』をめぐって——

岩本 和久

1. フロイトかパヴロフか？¹

ミハイル・ゾーシチェンコの小説『日の出前』は、『10月』誌1943年6/7号、8/9号に前半部が掲載された。しかし、個人的な回想に終始し、社会主義リアリズムの規範を大きく逸脱するこの作品は、戦時中という混乱した時期にソ連が置かれていたとはいえ、さすがに批判をまぬがれることはできなかった。後半部の発表は見送られ、党中央委員会や他の作家、批評家による激しい批判、あるいは公安機関（国家保安省）による調査が続いた。² 1920年代に諷刺作家として一世を風靡したゾーシチェンコは、第2次大戦後に作家同盟を除名され、事実上、作家生命を絶たれることとなるが、『日の出前』に対する批判はしばしば、この「作家の死」の契機とみなされている。

『日の出前』はきわめてユニークな作品であり、ソヴィエトの権力や文学界から教条的な批判を受けたのも不思議なことではない。

『日の出前』の語り手は、自らの「憂鬱」を苦しめている。彼はその原因をもとめて、過去を遡る。「憂鬱」や「不幸」という心情の原因となる強烈な体験が、過去のどこかにあるはずであり、それを見出すことで「憂鬱」や「不幸」を解消できるはずだと、彼は考えているのである。

語り手である主人公はこうして、10代に出会った女性たちや第1次世界大戦での従軍経験、さらに幼年期の記憶を、時間を遡る形で辿り、断片的な形で語っていく。「憂鬱」の起源の探究という主題を軸とすることで、この作品では未成年や子供の眼差しでとらえられた、きわめて日常的かつ私的な風景が、メランコリックな心情を伴いながら、叙述されることになる。

記憶の中に「憂鬱」の原因を見出すことのできない語り手は、さらに記憶以前の過去を探そうとする。記憶以前の過去を再構築し、「憂鬱」の原因を意識化するために彼が選

¹ 本論文は、拙論「ゾーシチェンコと精神分析」（『ロシア・東欧研究』33号、2005年、59-68頁）を発展させたものであり、特にこの項「フロイトかパヴロフか？」の内容は「ゾーシチェンコと精神分析」に重複している。

² 詳しくは、拙論「ゾーシチェンコと精神分析」66-68頁、を参照。

んだ方法は、夢の分析だ。記憶していない強烈な経験は、おそらく夢の中に痕跡を残しているとは彼は考えるのだ。

このような『日の出前』の内容を、欧米の研究者はしばしばフロイトと関連づけて解釈してきた。夢を解釈することによって、「トラウマ」を探し出そうとする『日の出前』の内容は、確かに精神分析的なものと言える。

たとえば、フォン・ウィレン＝ガーツィンスキは『日の出前』と精神分析を関連づけている。フロイトへの言及こそが『日の出前』が批判される原因であったのだと主張している。³

この見解に反駁したのがグリガである。1972年に『日の出前』の後半部が『星』誌に掲載された際、その序文を執筆したグリガは、この作品が1930年代のソ連でなされたフロイト批判を継承するものであると主張した。グリガによれば、ゾーシチェンコはこの作品でフロイトを拒絶し、唯物論的なアプローチを実践しているのである。⁴

『日の出前』は精神分析を批判した書であり、それはフロイトではなく、パヴロフの反射学に基づいているのだと、ゾーシチェンコ自身は主張した。たとえば、『日の出前』には反射学の立場からなされた、次のような精神分析批判が存在する。

かくも精緻に練り上げられたフロイトの精神分析は、性的興奮が関係している場合には治癒をもたらすに違いない。より正確に言えば、1次的な条件的刺激が条件的な性的刺激に変容する場合には。しかし、この治癒は完全なものには、より正確に言えば、最終的なものにはならないのではないかと疑うこともできる。なぜなら医師と患者は常に道徳的な範疇と衝突し、それらの向こうの正さなければならぬメカニズムを見ないからだ。断ち切らなければならぬ、神経の結合を見ないからだ。(C. 379)⁵

1933年に発表された『取り戻された青春』において、若さを取り戻そうとする老人の物語を展開したゾーシチェンコは、その発表後、パヴロフの研究会に招かれている。こうしてゾーシチェンコは、30歳代にパヴロフの助手を務めていた医師アレクセイ・スペランスキイ(1887/88-1961)と知り合うこととなり、『日の出前』の執筆にあたってはスペランスキイの助言を仰いでいる。『日の出前』には、語り手とスペランスキイの次のような対話を見ることができる。

「意識の領域、高次の心理的活動の領域は、あなたたち〔生理学者〕よりも私たち〔作家〕に属しているのです。人間の行動は犬や手術用ナイフを用いて研究できますし、しなければ

³ Vera Von Wiren-Garcznski, "Zoščenko's Psychological Interests", *Slavic and East European Journal*, 1967, Vol. 11, No. 1, pp. 3-22.

⁴ *Арс. Гулыга. «Повесть о разуме» М. Зощенко// Звезда. 1972, № 3. С. 142.*

⁵ 以下、引用されたテキストの日本語訳は岩本による。『日の出前』からの引用は *М. М. Зощенко. Собрание сочинений в 4 т. Т. 4. М., 2002* により、頁数のみを示す。

なりません。けれども人間には（そして犬にも）しばしば《幻想》が生まれ、同じ刺激のもとでも感覚の力を変えてしまうのです」

[…]

この会話の後、数年が過ぎ、私が新しい本を準備していることを知ると、生理学者はこの仕事について話すよう、私に頼んだ。

[…]

「しかし、どうやって？それは精神分析ですか？フロイトですか？」「まったく違います。それはパヴロフです。私は彼の原理を利用したのです。これは彼の思想なのです」(C. 204-5)

また、『日の出前』の後半部の発表が見送られた際、ゾーシチェンコはスターリンに宛てて弁明の手紙を送っているが、そこでも作家はこの作品がソヴィエト政権の意に沿うものであること、つまり、反射学の立場からなされたフロイト批判の書であることを強調した。

生活の芸術的表現の他に、この書物にはパヴロフの条件反射という科学的主題も含まれているのです。[…]

それに加え、フロイトの粗雑な観念論的誤りも明白にされていたのです。⁶

とはいえ、精神分析に関心を持つものであれば、作家が示した精神分析に対する「否定」を素直に認めることには、ためらいを覚えるだろう。まして、精神分析に関する一定の知識を有している作家の場合は。

20世紀初頭のロシアにおいては、多くの知識人が精神分析に関心を示しており、それは革命後、しばらくの間は、ソ連においても変わることがなかった。フロイトの著作はロシア語に次々と翻訳された。⁷

ゾーシチェンコも、精神分析に関心を寄せた作家の1人だった。彼はたとえば、1933年に発表された短編小説「治療と心理」で精神分析を題材とし、また自らも精神分析の治療を受けていた。エトキントが紹介する1937年の診療の記録は、ゾーシチェンコが自らの苦悩の原因を過去に求めていたこと、女性の胸に対してフェティッシュな関心を抱いており、エディプス・コンプレックスを連想させること、外科医の手術をめぐる去勢恐怖など、『日の出前』と共通する内容を多く含んでいて興味深いものである。⁸

⁶ «...Буду стоять на овоих позициях»// Исторический архив. 1992, № 1. С. 132-143.

⁷ 詳しくは以下を参照。Martin A. Miller, *Freud and the Bolsheviks* (New Haven, 1998) ; Александр Эткин. Эрос невозможного. СПб., 1993 ; ミハイル・バフチン『フロイト主義』磯谷孝、斎藤俊雄訳、新時代社、1979年。

⁸ Эткин. Указ. соч. С. 415. また、トマシェフスキイは、ゾーシチェンコが1926年にヤルタでセラピストの診療を受けていたとする。Ю.В. Томашевский. Хронологическая канва жизни и творчества Михаила Зощенко // Лицо и маска Михаила Зощенко. М., 1994. С. 346.

ホッジは論文「ゾーシチェンコの『日の出前』におけるフロイト的要素」において、この小説に見られる精神分析の影響を、具体的に指摘している。「除反応」、「エス」、「去勢」、「夢の作業」といったフロイトの概念と共通する考え方を、『日の出前』のテキストに読み取ることができるのだと、ホッジは言う。⁹

パヴロフやスペランスキイと交流していたゾーシチェンコが、反射学を評価していたことは間違いないだろうが、精神分析についてどのように考えていたのかについては、正確なところはわからない。精神分析に対する「否定」の振る舞いは、あるいは無意識のうちに精神分析に惹き付けられていたことの表れかもしれない。

ホッジの指摘を踏まえつつ、『日の出前』というテキストに精神分析との共通性を探るとするならば、やはり象徴への関心を見逃すことはできないだろう。

不幸の原因を求めて夢を解釈しようとする語り手は、水の夢、乞食の夢、虎の夢に注目する。荒れた海で泳いでいる夢や、部屋に大量の水が溢れる夢。乞食が部屋のドアをノックしたり、突然、通りに出現したりする夢。虎が部屋に入ってきたり、ドアの陰で吠えたりする夢。それらの意味を考察した彼が得た解釈は、母親の乳房が隠されることによる乳児の恐怖というものだ。水や虎は危険を意味する。乞食の手は奪う。虎の吠え声は雷鳴の記憶が変容したものだ。

ところが、メイジング＝デリックは、「水」、「手」、「虎」、「乳房」という象徴の体系が、夢の記述だけでなく、小説のテキスト全体を覆っていることを指摘している。無意識の表れである夢の内容だけでなく、意識された記憶を述べている部分にも、これらの象徴の体系が浸透しているのである。¹⁰

たとえば、虎（ロシア語では tigr）の主題は夢分析において、雷鳴と関係づけられる。この主題は回想の部分では、語り手を誘惑する女性 Tata T.（頭文字が T で始まるだけでなく、「雌虎に似ている」と形容される——C. 217）、あるいは語り手が女子学生ナージャと出かける映画館の名前「稲妻」（C. 218）として、女性と関係づけられながら提示されることになる。

また、夢分析の対象となる水の主題だが、回想の部分で語り手の父親は、水を飲んで倒れ、死んでしまう。学校の成績が悪かったために自殺を図った語り手が、水を流し込まれる様も回想される。また、語り手は金魚を水から出して、殺してしまう。主人公が第1次世界大戦で毒ガスを吸ったことも回想されるが、呼吸困難をもたらす点でガスは水と共通していると、メイジング＝デリックは言う。

上述したように、『日の出前』に先行する小説『取り戻された青春』でゾーシチェンコは、老いた身体が若さを回復する物語を描き、パヴロフ・サークルから関心を寄せられ

⁹ Thomas P. Hodge, "Freudian Elements in Zoshchenko's *Pered voskodom solntsa* (1943)", *Slavonic and East European Review*, 1989, Vol. 67, No. 1, pp. 1-28.

¹⁰ Irene Masing-Delic, "Biology, Reason and Literature in Zoščenko's *Pered voschodom solnca*", *Russian Literature*, 1980, Vol. 8, pp. 77-101.

ることになった。『取り戻された青春』や『日の出前』において、ゾーシチェンコは医学や生理学といった「科学」に関心を示したのだと言える。

しかし、作家である彼はスペランスキイに語ったように、『日の出前』では反射学という「科学」に関心を寄せながらも「幻想」に注目し、言語を用いて象徴の網を構築しようとした。そこでは、「科学」が対象とする身体が、言語に転化しようとしている。

以下に述べるように、こうした身体と言語の間の揺らぎは、作家ゾーシチェンコと精神分析に共通しているものである。

2. 精神分析における身体と言語

身体を表象しようとする試みが、言語という記号体系へと転化してしまう事態、言い換えれば言語を前に身体のイメージが疎外されてしまう事態を、私たちは精神分析に読み取ることができる。

言うまでもなく、フロイトは医師であり、若き日にウィーン大学で従事していたのは神経組織の研究だった。しかし、フランスのシャルコーのもとでヒステリー患者の治療に出会った彼は、心因性の病を治療しようと試みるようになる。そして、フロイトは患者の身体よりもむしろ、横たわった患者が発する言葉に耳を傾けることになったのだ。

精神分析においては患者の言葉の他にも、様々な文学的な要素が重要な役割を担っている。フロイトの理論を支えたのは、その文学的な素養であった。あまりにも有名なエディプス・コンプレックスの場合のように、神話をめぐる知識は彼の思索の基礎となった。孤児が本当の両親と再会するというブルジョア小説の典型的なストーリーに注目したフロイトは、それを「家族小説」として普遍化した。

また、「象徴」や「置き換え」あるいは「圧縮」といった記号操作にもとづくフロイトの夢判断は、言葉の隠喩的な豊かさを示す文学的な試みであり、その結果、20世紀の文学研究にも大きな影響を与えることとなった。フロイトがホフマンやドストエフスキイをめぐる著作を発表していることも、また忘れるわけにはいかない。

精神分析の発達理論もまた、身体が言語によって押しのけられていく過程として考えることができる。

フロイトはリビドーの段階的な発達を考える。「口唇」から「肛門」、そして「男根」へと、小児の性感帯は移行していく。それと並行して性の対象も自分自身の体から他の対象へと変化し、「自体愛」は「対象愛」に変わることになる。自他の区別の付かない幼児の世界には、社会的な関係が生れることになる。

このシナリオは何よりもまず、身体にもとづいている。具体的な性感帯が身体に措定され、愛の対象として幼児の身体や母の乳房が挙げられる。とはいえ、フロイトの考える夢の世界では、身体の部分が様々なイメージで表象されることになる。あるいは、様々なイメージが患者の言葉を通して、記号的な解釈を蒙ることになる。たとえば、女性が

夢に見た蠟燭は、男性器を意味している解釈されるのだ。

さらに「男根期」になると、エディプス・コンプレックスが導入されることになる。身体的な幻想の空間は、物語や神話という言語的空間に転化してしまうのだ。そこで展開されるのは父と母と子という人格の葛藤であり、そこで課題となるのは法が支配する社会への適応である。子は父に敵対しつつ、やがて父の法を超自我として受け入れ、社会に適応しなければならない。

フロイトによる子供の発達物語は身体的な原理にもとづいているが、去勢恐怖の導入と共に、成長の神話に変容してしまう。そのような状況は、たとえばアイデンティティ論を唱えたエリクソンのような「健康な成長」の物語を許容することにもなる。社会的に正当化されたアイデンティティを獲得することを目標とする物語は、もはや身体的なイメージの空間ではなく、理想的な結末を目指して物語が進む「教養小説」であると言えるだろう。

患者の言葉に耳を傾けるという精神分析の方法もまた、身体イメージを言語が破壊するという結果につながるものだった。メディア論の研究者であるフリードリヒ・キットラーは、シャルコーのもとでフロイトが「フィルム」と出会ったことについて、また、フロイトが視覚的イメージを言語によって駆逐したことについて、次のように語っている。

シャルコーは、サルペトリエールに任用されてすぐに、パリのこの荒れはてた癲狂院の面目を一新し、設備の整った研究施設に変貌させたのであったが、1883年に至って技師長に映画を撮れという命令を出している。それを受けて、のちにローライフレックスの設計で有名になったアルベール・ロンドが、マイブリッジとマレーを完全に模倣し、「大ヒステリー・アーチ」を連続露光カメラで切り刻んでみせたのであった。ウィーンからサルペトリエールに研修に来ていたひとりの若い生理学助手が、その場に居て撮影の様子を目撃していた。だがしかし、ヒステリーの映画から精神分析へという歴史的大アーチを、このフロイト博士がかけてみせることはなかった。蓄音機のとくと同じように、彼は、あくまでも技術メディアには抵抗して、どこまでも言葉というメディアの方にこだわり、綴り字をあらたに切り刻むということに執着したからである。

その目的のためにフロイトはまず何はともあれ、彼の女性患者たちの身体像を静止させねばならなかった。すなわち彼女たちをベルク通りの長椅子に横たえたのである。それからヒステリー患者たちがじっさいに見たか、あるいは幻覚として見た像にたいしてトーキング・キュアなるものを実施する。男すなわち強迫神経症、女すなわちヒステリーといった性別にはいささかも言及することなく、とはつまり、ヒステリー患者を男性形で書いたり、強迫神経症患者を男女の別なく複数形で書いたりしながら、『ヒステリー研究』は以下の引用で、トーキング・キュアを次のように定式化している。

「イメージが回帰するときは、思考が回帰するときよりも一般にことは容易である。ヒス

テリー患者は視覚的なヴィジョンを幻視する人が大半なので、強迫神経症の患者ほどには分析家を困らせない。思い出のなかからひとたびイメージが浮かび上がってくると、そのイメージを言葉で描写すればするほど、それはぼろぼろと崩壊して、定かでないものになっていくと、患者はいう。病人は、イメージを言葉に置き換えることによって、イメージをいわずに減らせる。」¹¹

発作を起こしたヒステリー患者が示す、仰向けになった状態で頭と爪先のみを地に付け、腰を上方に反らせたブリッジの姿勢。シャルコーはその姿を「連続写真」に収めさせたのだという。マレーやマイブリッジが試みたことで知られる「連続写真」は、エジソンやリュミエールによって開発される「映画」の先駆けとして知られている。そして、シャルコーによる「連続写真」撮影の場には、若きフロイトが居合わせたのだ。

しかし、フロイトは狂気を視覚的な身体像として、フィルムに固定しようとはしなかった。また、「電話」が音声を正確に伝えるように、患者の言葉を客観的に受け止めようとしながらも、言葉を蓄音機で保存しようとはしなかった。¹² フロイトは「映画」や「蓄音機」ではなく、「文字」の世界に患者を置こうとしたのである。

そんなフロイトの行為は、言語によって映像を破壊しようとするものだった。治療を受けるヒステリー患者は視覚的な幻影を言葉で語り直すことにより、視覚的イメージを「すり減らせ」、幻影を「ぼろぼろと崩壊」させる。幻影にまつわる重要な事柄を患者が言語化できた時に、幻影は最終的に消滅してしまうのだという。

キットラーによるならば、精神分析とは身体を言語化し、意味づけすることによって、その視覚的イメージを消滅させようとする試みなのである。

3. 「フロイトではなくパヴロフ」

『日の出前』においてゾーシチェンコは、「水」、「手」、「虎」、「乳房」という象徴的な主題を、夢の中に読み取ろうとする。これらの主題の分析を通して、彼は「母親の乳房が隠されることによる乳児の恐怖」という解釈を得る。この幼児期の恐怖こそが、彼の苦悩の原因とされる。

と同時にメイジング＝デリックが指摘したように、ゾーシチェンコはそれらの主題を、夢とは関係のない回想の記述にも浸透させる。その結果、回想は象徴的な主題に満たされた、きわめて文学的なテキストと化す。

象徴的な夢分析、あるいは象徴の網の構築という『日の出前』の内容が、言語に支えられていることは言うまでもない。夢分析とは言葉の解釈であり、象徴の網とは言語テ

¹¹ フリードリヒ・キットラー『グラモフォン・フィルム・タイプライター』石光泰夫・石光輝子訳、筑摩書房、1999年、222-223頁。

¹² 同書、147-149頁。

クストの構築だ。

と同時に、これらの主題が身体性に貫かれていることもまた、見逃すことはできないだろう。「手」や「乳房」が身体的な主題であることはもちろんだが、『日の出前』においては「水」もまた「窒息」を表すきわめて身体的な主題であると言える。「母親の乳房が隠されることによる乳児の恐怖」という「飢え」につながる夢の解釈もまた、きわめて身体的なものだ。

このような身体的な主題が氾濫した回想の記述は、身体性で世界を包もうとする試みに思えなくもない。

具体的な例を検討してみよう。

ペテルブルグ。カメンノオストロフスキイ大通り。「スチェレゲーシイ」の記念碑。開いたキングストン弁の傍らの2人の水兵。ブロンズ色の水が船倉に流れ込む。

目を離すことなく、僕はブロンズ色の水兵とブロンズ色の水流を見つめる。僕はこの記念碑が好きだ。

船が沈没するこの悲劇的な場面を見るのが、僕は好きだ。

ベンチの上で僕に並んでいるのは、中学生のナージャ・V。僕たちは2人とも16歳だ。

ナージャは言う。

「要するに、あなたを好きになったのは無意味だったのね。女の子たちは皆、そんなことするなと私に忠告したのよ……」

「でも、どうして？」記念碑から目を離さぬまま、僕は尋ねる。

「だって、いつも私が好きなのは、陽気な、冗談のうまい人たちなのよ……。あなたときたら、30分以上も黙って座ってられるじゃない」

僕は答える。

「僕よりも前に何万人もの人が話している言葉を話すことが、長所だとは思えないな」

「それならば」ナージャは言う。「あなたは私にキスしてくれなくては」

僕は振り向いて言う。

「ここでは人に見られてしまうよ」

「では映画館に行きましょう」

僕たちは「稲妻」という映画館に行き、そこで2時間キスを交わす。(C. 218)

語り手とナージャが逢引を交わす「スチェレゲーシイ」の碑は、ペテルブルグに今も存在する。地下鉄「ゴーリコフスカヤ」駅の出口に近い公園の中にある、やや大きめの石碑だ。これは日露戦争の際に沈没した軍艦「スチェレゲーシイ」の乗組員を追悼したもので、その表には沈没する船の上の乗組員が浮き彫りにされている。

語り手が魅了されるこの石碑には、「水」と「窒息」の主題を読み取ることができる。船の中には水が流れ込み、水兵は死を迎えることになる。

語り手の傍らには、恋人の「ナージャ・V」が座っている。彼女の姓名も意味ありげなものだ。「ナージャ」はロシア語で「希望」を意味しているが、姓はただ「V」という頭文字だけ示されている。沈没を前に「希望」を失いかけた水兵の絵を眺める者にとって、「V」の文字は「水」（ロシア語では voda）の頭文字として理解されることだろう。「ナージャ・V」とは「希望」と同時に「窒息」や「死」を意味する、両義的な危うい名前である。

語り手はナージャにその退屈さを責められる。30分以上も沈黙し続けてしまうというのだ。その非難に対し語り手は、「言葉を話すことが長所だとは思えない」と反論する。

「水」や「窒息」のイメージは、ここで「沈黙」に、言葉の否定に転化する。沈黙する語り手の身体は、閉ざされている。水や空気といった外部の物質は体内に入るばかりであり、言葉として外部に流出することがない。

そんな語り手に対し、ナージャはキスを迫る。2人は映画館「稲妻」（ここで「稲妻」の主題が登場する）に行き、そこで2時間もキスを交わす。体内に閉ざされていた大気は、キスという形で体外に流れ出すが、しかし、それは別の身体に再び閉ざされることになる。女性「V」による「窒息」のイメージが、消滅することはない。

この引用部分からも読み取れるように、『日の出前』は事件をクロノジカルに語る回想ではない。それは身体をめぐるイメージを連ねたテキストなのである。

『日の出前』においては、父母との葛藤や、女性との恋愛が語られてもいる。とはいえ、それらはあくまでも断片的な回想を連ねたものでしかなく、そこに確固とした物語を見出すことはできない。語り手の父はあっけなく死んでしまう。女性たちとの交際も、ドラマチックな物語を展開できないまま、終わってしまう。夢の分析によって語り手は、母の乳房が奪われるというエディプス的な主題を導き出すが、この主題は物語を展開することのないまま、あくまでも生理的、身体的な水準に留め置かれる。

『日の出前』というテキストは、「言語」と「身体」という2つの原理の間で揺れている。象徴的な網を構築するという点で、それは言語を志向しているが、同時に物語を拒絶し、身体を語り続けようとしている。

『日の出前』を支えているのが精神分析なのか反射学なのか、フロイトなのかパヴロフなのか、という謎も、この揺らぎの中で考えるべき問題のように思える。フロイトと異なり、ゾーシチェンコは物語を拒絶する。物語ではなく身体を求めるのだ。『日の出前』におけるフロイト批判は、そのことをよく表している。

我々は精神神経症のメカニズムが生れるのを見た。それは条件反射の原理に従って生じていた。条件的な神経の結合が、4つの「病的な対象」を一体化したのだ。その「対象」の1つは母の乳房だった。しかし、これは乳房——すなわち栄養、食物なのだ。この対象に一致するのは飢えの感覚であり、エロスではない。対象の喪失は、幼児に死を、根絶をもたらすように思えたことだろう。戦いや精神的な葛藤が自己保存の本能の範囲を外れることはな

かったのだ。

我々のあらゆる衝動は性的欲求に帰結するのだと、我々の感覚の基礎には、幼児の感覚の基礎にさえ、エロスが存在しているのだと、フロイトは考えている。だが、ここでの例は別の事柄を伝えているのだ。この精神神経症のメカニズムには、性的なものが欠けているのだ。子供のさらなる発展の結果、ようやくその主題が持ち込まれることになるのだ。

[…]

去勢の恐怖のために、リビドーの喪失、うれしきや喜ばしさの喪失が起こったのではない。あらゆる恐怖が去勢を促すのである。

幼児の恐怖や精神的葛藤は、より粗暴な、物的な、物質的な原因のために生じたのだ。その条件的な役割を幼児が誤った対象こそが、精神神経症の起源なのであり、恐怖と喜びの喪失を生んだものなのだ。

飢えが癒えた喜びは、恐怖を伴うことになった。条件的な神経の結合は、この喜びを不幸と一体化した。まさにこの条件的な結合こそが喜びを消滅させ、去勢をもたらしたのだ。(C. 376-377)

性的なものを否定し、精神分析から逃れようとする姿勢は、多くの作家に見られるものだ。とはいえ、性的なものから社会的なものへ、あるいは文化的なものへ逃れるのではなく、性的なものから生理的、身体的、物質的なものへ逃れようとするこの弁明は、やはりユニークなものと言わねばならない。

また、小児性欲や去勢といったフロイトの理論に沿う形で、自らの性的な要素を否定するこの弁明について、精神分析を評価する作家が全体主義体制下で行った見せかけにすぎないと、解釈することもできるだろう。あるいは、精神分析家であれば、語り手が「否定」している内容こそが真実なのだ、主張するかもしれない。

しかし、ここでは作家がエディプス的な物語を離れ、身体そのものに向かおうとしていることに注目してみたい。言語を離れ身体に回帰しようとする、「フロイトではなくパヴロフ」というゾーシチェンコの主張は、恐らくそのような事態を意味しているのだ。

通常の小説であれば、物語は過去から未来へと語られるだろう。しかし、不幸の原因を探す『日の出前』の語り手は、近い過去から遠い過去へ、記憶された過去から記憶以前の過去へと、時間を遡る形で断片的なテキストを構成している。それはエディプス的な、あるいはアイデンティティ形成の物語を拒絶し、原初の身体的な空間へ接近しようとする試みと考えられる。

とはいえ、象徴を張り巡らせたテキストを構築しようとする欲望から、作家は逃れられてはいない。また憂鬱の起源を「乳房の喪失」という身体的な形で認識したところで、その認識は言語によってなされるしかない。『日の出前』のテキストは、身体と言語の間であくまで漂い続けている。